第３章

祭り参加と居住希望

データサイエンス学部　　岡野晴菜

1. 問題の所在

長浜市が提供している『長浜市過疎地域持続的発展計画』(2023) によると、長浜市全体の生産人口は昭和 35 年において 23.65%だったが、平成 27 年には 14.63%にまで減少している。長浜市の全人口は、一度増加してから衰退しているのにも関わらず、生産人口の割合は年々減少している。このままでは、長浜市人口のうち、高齢者の割合が増加し、地方の運営が難しくなることが想像に難くない。そのような状況を避けるためにも、長浜市に居住する若年人口を増加させなければならない。

人口を増加させるためには、居住意欲を増加させる必要がある。居住意欲を増加させるための一つの方法として、長浜市に居住している若者に対して、祭りへの参加を促進させることを挙げる。久保（2013）の研究によると、少子高齢化が進み、以前のように祭りの開催ができなくなったが、授業の一環としてふるさと学習という名目で祭りや伝統行事に参加することで、祭りや伝統行事の維持をすることや子どもたちの地域への関係性を深めることができると述べている。

また、包と服部 (2017) は「移住意向 (意向が強いと弱い) によって移住要件が異なる。」という仮説を検証するために、移住希望の強さの差による移住要件の t 検定を行った。首都圏在住者の移住希望の理由として、「地域づくり活動が行なわれていること」「文化イベントや祭が行なわれていること」などが有意であるとされた。

岡 (2003) によると、祭りに参加して思うことは「自分の町はすばらしい」が最も多い。祭りに参加することで、自分が居住している地域の魅力を改めて知ることができ、居住意欲を増長させることができると考える。

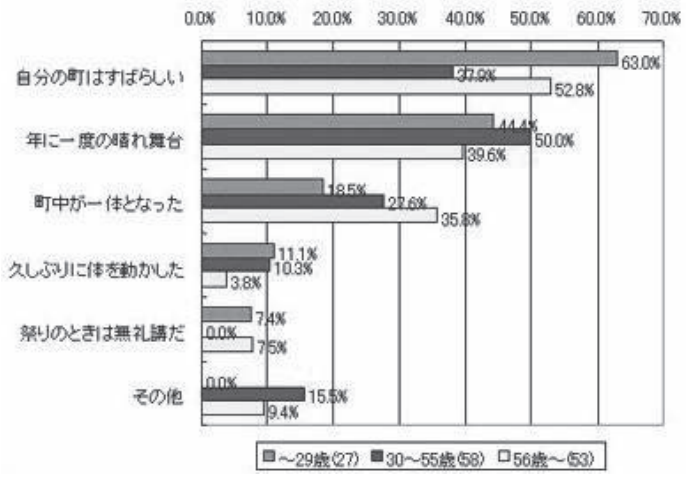

図 1. 祭りに参加して思うこと

以上をふまえ、本稿では、祭りへの参加が居住している地域への将来の居住希望を増長するのかどうか検討することを目的とする。続く第２節では先行研究を整理し、本稿で分析をする仮説を構築する。第３節では使用するデータと変数を説明し、第４節で分析結果を報告する。最後に第５節で分析結果から考察を行う。

２．先行研究と仮説の検討

２－１．先行研究

少子高齢化と祭りに関する論文は複数存在しているが、その中でも久保（2013）は、こどもの減少によって地方がどのような影響を受けるのかを調べるために、珠洲市若山町における児童の歴史と地表の祭りについて述べている。2006 年に若山小学校は上黒丸小学校と統合し、若山町の児童だけでなく、かなり広い地域の児童が在籍しているにもかかわらず、若山小学校の児童の減少は、珠洲市全体の児童数の減少を表している。児童を中心に祭りの担い手である若い世代が減少・地域の高齢化により、祭りは以前のように実施できていない。しかしながら、教育課程におけるふるさと学習という名目で地域の高齢者との交流を行ったり、地域の祭りに参加をしたりしている。本来の祭りの内容とは異なっているが、児童は地域の伝統への理解を深めることができるとしている。

また、現在居住している地域からの移住希望に関する論文は複数存在する。包ら（2017）は、移住希望者の移住要件と移住以降について把握するために Web モニター1000 人に対してアンケート調査を実施した。その結果、移住を希望する人は学歴、既婚、家族構成、雇用形態、収入などの個人属性に特徴があることが確認された。また、全体の傾向として、医療環境や住宅の確保、買い物の利便性や自然環境が良いといったことを移住要件としている移住希望者がいることがわかった。

地方の若者離れの原因とこれまでの地域の祭りとの関わり方に関する先行研究は複数存在する。菊地と森下（2017）は、新潟縣佐渡市にある佐渡高校の卒業生を対象に、佐渡市の若者の佐渡離れの原因と若者のこれまでの地域の祭りのかかわり方を調べ、関係性を明らかにするために、「地域の祭りのかかわり方と若者の佐渡離れは関係している」という仮説のもと研究を行った。結果として、祭りは地位の人々と交流を深め、地域の良さを感じることができる場であるため、現在の祭りのあり方を考えるべきだという結果が得られた。具体的な課題として、「小学校の間だけ・小中学生の間だけ祭りに参加していた人が多いこと」、「学校で伝承芸能を習っても、学校で発表するだけであったり、祭りに参加しても数回で終わってしまったりする場合が多いこと」、「男性のみが参加できる祭りが多く、女性は地域の祭りにかかわることができない場合が多いこと」が挙げられている。しかし、菊地らの検討結果については、積み上げ棒グラフの可視化にとどまっており、どのような要因がこの結論を生み出しているのか、多変量解析の結果が示されていないことから、まだ研究は萌芽的な段階といえる。さらに、菊地らは研究対象を市内の高校卒業生に限定しており、県外に居所を置くタイミングになる高校在学生に関する研究が行われていない。年齢や自宅の文化資本など、自宅住所以外にも影響を及ぼすと考えられる要因への考慮がない。

２－２．仮説の検討

以上を踏まえて、本稿では 3 つの仮説を検討する。第一の仮説は「祭りに参加する人は長浜市への居住意欲が高い」という仮説を検討する。菊地ら（2016）の研究では、祭りが好きな人が将来佐渡に帰りたいかどうかのクロス集計表を掲示しているが、回答者数が少なく、得られたデータが偏っている可能性があるためこの仮説を検討する。

第二の仮説では「祭りに参加する人は長浜市に貢献したいと考える」という仮説を検討する。菊地ら（2016）の研究では、佐渡に戻ってからどうしたいかという視点が足りていないためこの仮説を立てる。

第三の仮説として「祭りに参加する人は社会に貢献したいと考える」という仮説を検討する。第二の仮説で「祭りに参加する人は長浜市に貢献したいと考える」という仮説を検討するが、第二の仮説が長浜市に対してのみなのか、社会全体に対してのみの貢献希望なのかを検討するためにこの仮説を立てる。

仮説を検討するにあたり、まず長浜市への居住希望・長浜市への貢献希望・社会への貢献希望と祭りへの参加の関与パターンとの 2 変数の関連をクロス表によって検討する。しかし、今回の仮説を検討するには、長浜市への居住希望・長浜市への貢献希望・社会への貢献希望と祭りへの参加との関連を見るだけでは不十分である。なぜなら、高校偏差値や信頼のおける友達の数、学年、性別は生徒の逸脱志向と関連し、家庭の文化資本や家庭の蔵書数、親からの将来の長浜市への居住の勧めは祭りへの参加と関連し、それらの要素は長浜市への居住意欲・長浜市への貢献希望・社会への貢献希望とも関連していると想定されるためである。つまり、祭りに参加することの効果は、先述した文化資本や逸脱志向といったその他の仮説では説明できない効果として検証する必要がある。よって、2 変数の関連だけでなく、本人の属性や周りの環境を統制した多変量解析によって祭りに参加することの効果がなお有意であるか検討する。

３．使用するデータと変数

３－１．使用するデータ

使用するデータには、「長浜市中高生調査（こども若者実態調査）」のアンケートデータを使う。調査の概要を表 1 に示す。

表１．調査概要

調査名	長浜市中高生調査（こども若者実態調査）
調査対象	長浜市内の公立高校
調査時期	令和5年7月20日～9月11日
調査方法	インターネット調査（生徒に調査依頼および回答先のQRコード付き案内チラシを配付）
抽出方法	全数調査
サンプルサイズ	900

※調査の詳細は第1章に記載

３－２．使用する変数

従属変数には、第一の仮説の居住希望については「長浜市に将来居住したいと考えているか」を使用する。「あなたは将来、長浜市に住みたいと思いますか」を使用する。この問いでは「住みたい」「どちらかと言えば住みたい」「どちらかと言えば住みたくない」「住みたくない」の 4 点尺度と「どちらとも言えない」を合わせた 5 項目が上記の質問に対する選択肢として用意されている。解釈をしやすくするために、「1. 住みたくない」「2. どちらと言えば住みたくない」「3. どちらとも言えない」「4. どちらと言えば住みたい」「5. 住みたい」とする。

第二の仮説の長浜市への貢献願望については「将来の職業を考えるうえで、次のア～クのことについて重視しますか。」の項目「長浜市に貢献する」という設問を使用する。第三の仮説については、社会への貢献願望については、項目「社会に貢献する」を使用する。この設問では「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」の 4 点尺度と「無回答」を合わせた 5 項目が上記の質問に対する選択肢として用意されている。解釈をしやすくするために「1. あてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. まああてはまる」「4. まったくあてはまらない」とする。

独立変数については、すべての仮説において「ここ 1 年間で、あなたは長浜市内のお祭りにどのように関わりましたか。(複数回答)」を使用する。この問いでは、「屋台での購入・イベント見学」「祭りの準備参加」「役割を持って参加」「なにもしない・行かない」の 4 つの選択肢があり、複数回答となっている。本分析では、これらをダミー変数として使用せず、祭りへの貢献度合いを表すため、「役割を持って参加」が選ばれた場合は 4、「祭りの準備参加」が選ばれた場合は 3、「屋台での購入・イベント見学」が選ばれた場合は 2、「なにもしない・行かない」が選ばれた場合は 1 とする順序変数を用いる。これを個人の「祭りレベル」とした。

統制変数については、生徒の属性を知るために、女性ダミー、学年（3 カテゴリ）、高校ランク（偏差値に基づく順位）、都会への興味（4 カテゴリ）、逸脱志向（2 つの変数を合算した連続変数）、家庭の蔵書数（6 カテゴリ）、家庭の合計文化資本（連続変数）、親からの将来の長浜市居住の勧め（3 カテゴリ）、信頼のおける友達の数（5 カテゴリ）を使用する。すべての変数において、無回答を欠損値とする。

表２．使用する変数の記述統計量

長浜市居住者（n=720）

	Mean(%)		Mean(%)	SD		Mean(%)	SD
従属変数		**統制変数**					
長浜市への将来の居住願望		性別			家庭の文化資本：合計	2.6	0.81
住みたい	13.8	男性	46.2		親の勧め：将来の長浜市居住		
どちらかと言えば住みたい	25.6	女性	53.8		よく勧められる	8.5	
どちらとも言えない	43.5	学年			たまに勧められる	25.6	
どちらかと言えば住みたくない	11.3	高校1年生	52.4		全く勧められない	65.9	
住みたくない	6.0	高校2年生	33.3		信頼のおける友達の数		
長浜市への貢献願望		高校3年生	14.3		0人	3.3	
とてもあてはまる	12.0	高校ランク（偏差値の順位）	2.7	1.50	1~2人	11.4	
まあまああてはまる	42.7	都会への興味を持つ			3~4人	23.2	
あまりあてはまらない	32.5	そう思う	36.7		5~9人	25.7	
まったくあてはまらない	32.5	どちらかと言えばそう思う	40.6		10人以上	36.3	
社会への貢献願望		どちらかと言えばそう思わない	15.8				
とてもあてはまる	31.3	そう思わない	7.0				
まあまああてはまる	52.8	逸脱志向（対数変換前）	2.9	1.05			
あまりあてはまらない	13.4	家庭の蔵書数					
まったくあてはまらない	2.5	10冊以下	27.4				
独立変数		11~25冊	27.4				
祭りレベル		26~100冊	30.0				
役割を持って参加	4.3	101~200冊	8.6				
祭りの準備参加	3.2	201~500冊	4.1				
屋台での購入・イベント見学	67.2	501冊以上	2.5				
何もしていない・いかない	25.2						

４．分析

４－１．基本的な分析

基本的な集計として、各従属変数と祭りレベルについてクロス集計を行った。図 2～4 に示す。

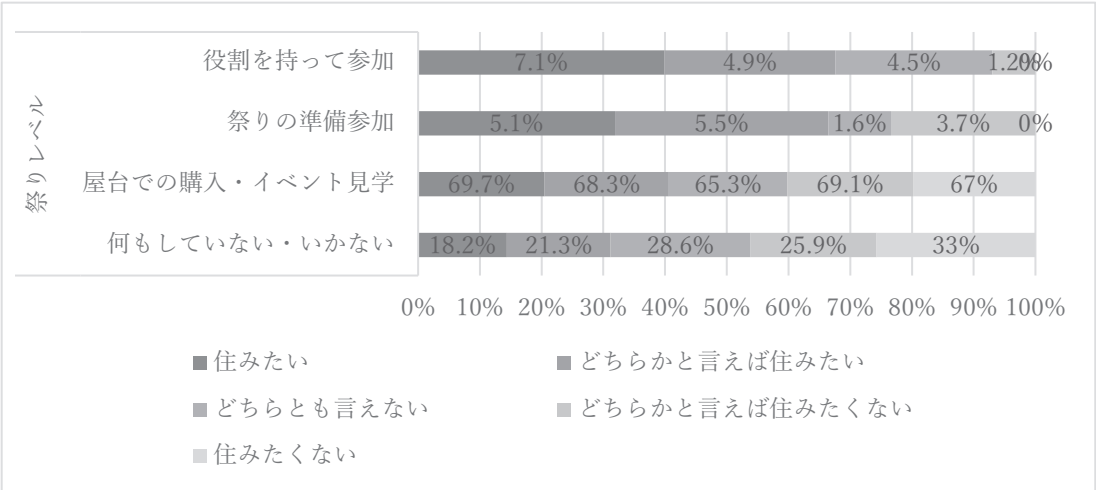

図２．祭りレベルと長浜市への居住願望の関係

まず、図 2 は祭りレベルと長浜市への居住願望についてのクロス集計表である。この図によれば、祭りレベルによって長浜市の居住願望はほぼ変わらず、関連性は低いと考えられる（χ^2=19.17, p=0.084）。

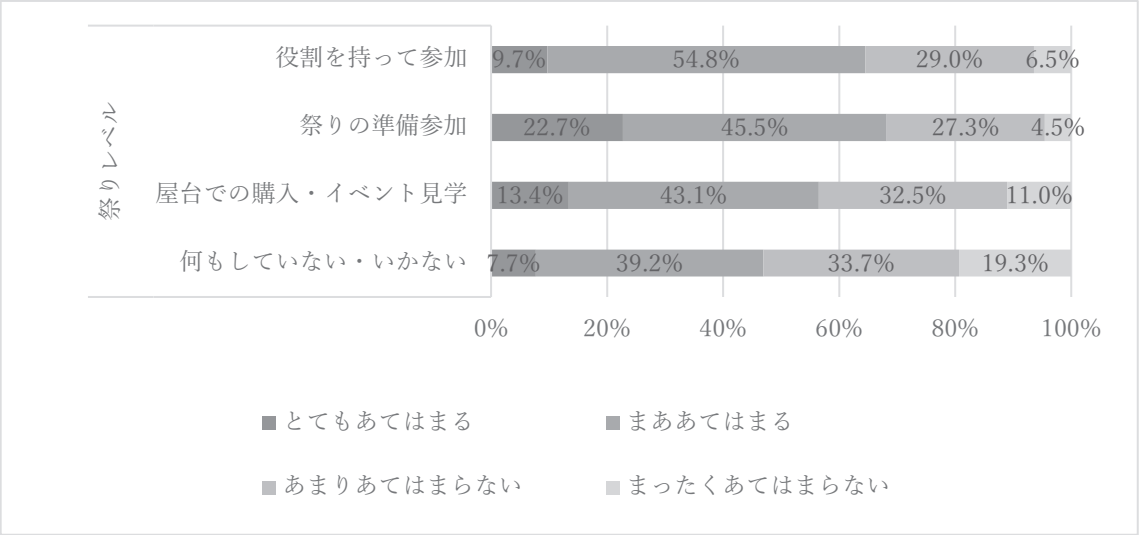

図３．祭りレベルと長浜市への貢献願望の関係

図３は祭りレベルと長浜市への貢献願望についてのクロス集計表である。この図によれば、祭りレベルが高いほど長浜市への貢献願望が高い様子が見られ、祭りレベルと長浜市への貢献願望には関連性があると考えられる（χ^2=17.079, p=0.047）。祭りへの貢献度が高いほど、長浜市への貢献願望が高くなることがわかった。

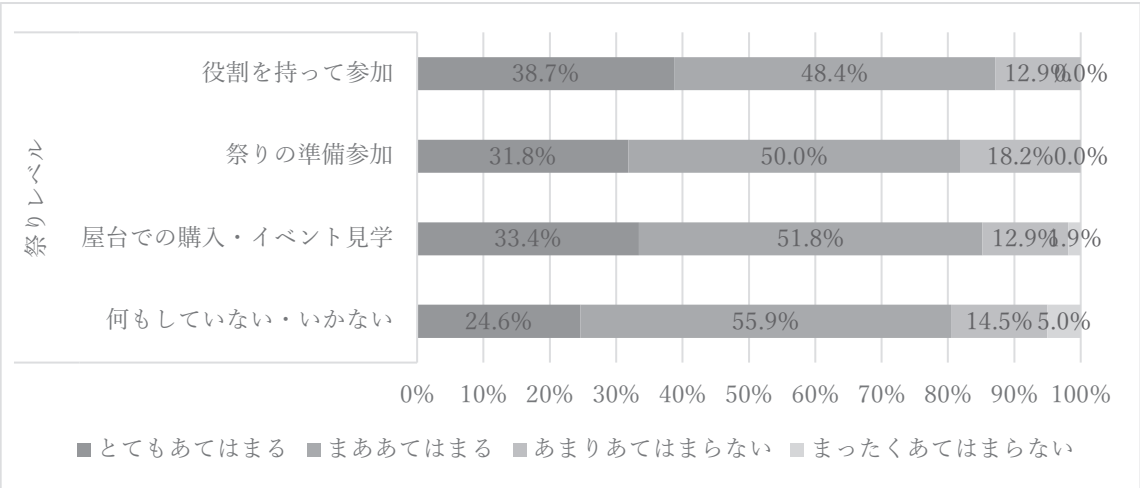

図４．祭りレベルと社会への貢献願望

図４は祭りレベルと社会への貢献願望についてのクロス集計表である。この図によれば、祭りレベルは社会への貢献願望はあまり関係しておらず、関連性は低いと考えられる（χ^2=11.407, p=0.249）。

４－２．多変量解析

本節では、それぞれの統制変数の影響を重回帰分析によって検討する。表３は祭りレベルと統制変数を説明変数として重回帰分析を行った結果である。この表によると、クロス集計表で確認できた祭りレベルと長浜市への貢献希望の関連性に加えて、クロス集計表では確認できなかった祭りレベルと将来の長浜市居住希望・社会への貢献希望の関連性が確認できた。

将来の長浜市居住希望、長浜市への貢献希望、社会への貢献希望のすべてにおいて、祭りレベルが 0.1%水準で有意に関連しているという結果が得られた。だが、係数の大きさが異なっており、将来の長浜市居住希望における祭りレベルが最も値が大きいことがわかる。

以上の結果より、祭りレベルは将来の長浜市居住希望、長浜市への貢献希望、社会への貢献希望のすべてにおいて祭りレベルは有意な影響を及ぼしており、影響の大きさはそれぞれ異なることがわかった。この結果を踏まえて次節では考察を行う。

表３．重回帰分析の結果

	将来の長浜市居住希望		長浜市への貢献願望		社会への貢献願望	
	回帰係数	標準誤差	回帰係数	標準誤差	回帰係数	標準誤差
(定数)	3.708		2.398		3.077	
祭りレベル	0.215 ***	0.139	0.145 **	0.112	0.091 **	0.083
性別	-0.003	-0.002	0.043	0.025	0.077	0.053
学年	-0.008	-0.006	-0.045	-0.037	0.001	0.001
高校ランク	0.021	0.030	0.013	0.022	-0.053 **	-0.108
現在の考え：都会への興味をもつ	-0.348 ***	-0.304	-0.077 *	-0.081	0.088 **	0.109
逸脱志向	-0.362 **	-0.115	-0.261 **	-0.099	-0.405 ***	-0.181
家庭の蔵書数	0.000	-0.009	0.000	0.031	0.000	-0.003
家庭の文化資本：合計	0.051	0.040	-0.094 *	-0.088	-0.070 *	-0.078
親の勧め：将来の長浜市居住	0.263 ***	0.164	0.289 ***	0.215	0.163 ***	0.142
信頼のおける友達の数	0.070 *	0.077	0.090 **	0.117	0.039	0.060
n	717		705		705	
調整済み決定係数	0.142		0.093		0.084	

*：p<0.05, **：p<0.01, ***：p<0.001

５．考察

ここでは、祭りへの参加状況が将来の長浜市居住希望、長浜市への貢献希望、社会への貢献希望にどのように影響を及ぼすのか重回帰分析を行った結果について考察する。すべてにおいて祭りへの参加状況が統計的有意に関連することがわかった。また、偏回帰係数の大きさは将来の長浜市居住希望、長浜市への貢献希望、社会への貢献希望の順に大きいことから、祭りの参加形態は長浜市への居住願望に影響を及ぼしていることも確認された。これは、祭りを通して長浜市の良さを知ったからだと考えられる。「都会への興味をもつ」の偏回帰係数が負の値をとっていることからも、都会よりも地元の良さを知っているからだと思われる。

残された課題について指摘する。まず一点目は、長浜市への貢献希望、社会への貢献希望の質問の仕方である。この質問では、職業選択に関するものという条件があったため、本人が長浜市や社会の貢献願望を現在持っているかどうかの立証が不十分であった。また、親からの勧めについても、頻度のみの回答で、親の勧めの理由や強さを考慮が不十分であ

ったため、設問の改善を行う必要がある。

二点目は、使用したデータの制約である。今回は滋賀県長浜市のデータであるため、限定的な結果である。全国サンプルを使用した分析により、日本社会全体における限界集落になる前の対策を議論することが可能となるだろう。

６．むすび

本稿の調査結果から、生徒のうちから祭りに参加し、深くかかわることで地元の良さを知り地元への居住意欲を深め、社会及び地元への貢献をしたいと思う気持ちが強くなることが示唆された。祭りへの参加を促進し、地元の良さを知ることで、就職・進学のために地元を離れたとしても将来的に地元に帰ってきたいと思ってもらうことができるのではないかと考える。

参考文献

包薩日娜・服部俊宏，2017,「首都圏在住移住希望者への web アンケートによる地方移住要件と意向に関する研究」『環境情報科学 学術研究論文集』一般社団法人環境情報科学センター，31: 231-236.

菊地亜美・森下修次，2017,「佐渡島における若者の祭りに関する意識調査」新潟大学教育学部 2017 年度卒業論文.

久保沙也加，2013,「児童数の減少と地域の祭りの変化」金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書.

長浜市，2021,『長浜市過疎地域持続的発展計画』.

岡絵理子，2003,『伝統的祭りと地域社会－「コミュニティと祭り調査 2002」より』,（2024 年 2 月 6 日取得，http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/seminа/s0304/mat018.htm）.